

## 武蔵野日曜講筵 復活節祈禱会

## 十字架道

——ルカ伝第23章33～43節、他——

1978年3月26日

小池辰雄

左右の十字架 中央の十字架 主我一如

## ●左右の十字架

「<sup>さされしやうべ</sup>髑髏」とい<sup>ところ</sup>う処に到りて、イエスを十字架につけ、また悪人の一人をその右、

一人をその左に十字架につく」(ルカ23:33)

ゴルゴタ、髑髏という名前からして、終末的な神秘的な処です(『無者キリスト』第六転「十字架」の項参照)。この両側の十字架は、これは本当に罪人の処刑ですね。まん中の十字架だけは義人の処刑です。しかもこの罪人は、右は碎けた魂、左は傲慢なる魂です。

「人類はこの二種に分けられる」

と私は申しました。実に不思議なことです。20世紀末期の姿は大体左側。残りの僅かな人々が右側。20世紀の人類は大体左側で滅亡への道をたどっている。右側は救われる路にいます。だから、21世紀が来ても、21世紀は決して祝福された世紀だとは思わない。或はノストラダムスの預言のように、20世紀の末に人類は大混乱に陥り、破滅の様相となるかも知れない。どの道、終末的です。今や終末的現実。これは原始キリスト教の使徒たちの時と同じことです。今の方がもつと深刻です。黙示録で預言されている通り、最後の審判の期が迫っているようです。質的に今世紀はいよいよよそうなんです。その審判の現実がもし来たら、黙示録以上の事になりそうです。もつと悲惨な事になる。サタン的な霊の力がそれを招く。神様は審判したくないけれども、やむを得ずしてそういう事になるでしょう。忍耐に忍耐を重ねているところの、

「<sup>こたつち</sup>羔の怒り」

が来る。羔の怒りとは何と逆説的な言葉でしょう！ 一番柔和なるものが怒るとは！ 言うまでもなくキリストの怒りです。

我々は少なくとも、右側の残れる民でありたい。そういう「神の民」がどういう人々であるか。ただ

「キリスト者であるから」

などというなまやさしいことはありません。誰が右側であるかは、神のみが定め給う。十字架上の盗賊と私たちとは質的には同じです。右でもあり、左でもあります。左側の傲



慢なのはこう言いました、

「お前はキリストではないか。自分と俺たちを救え！」

すると右の方の罪人が禁めて言いました、

「おまえは同じく断罪されながら、神を畏れないのか！ 俺たちはさんざん悪

事をした報いを受けているのだから当然だ。けれども、この人は何の不善も

しなかったのだ」

と。彼のこの言葉の中に、

「なぜ神を畏れぬか」

と言っていることに注目したい。この罪びとは十字架上で神を畏れていました。悔改めの心になって、平伏していました。畏れるとは平伏すること。つねづね私は言っている、

「降参しなければ、平伏さなければ、参りました！という心にならなければ、福音

の世界に入れない。聖書がわかるのわからないの、研究のどうのこうのと、そん

なことではない」

と。本質的には我々は左の盗賊と同じです。モーセの十言〔十誡〕に及第できない、況やキリストの山上の大告白には。パリサイ・パウロは及第したと思つたら大間違いだつた。マルティン・ルッターは及第しようと思つて一生懸命やつたけれどもだめだつた。法然も親鸞も日蓮もみんなそうです。及第しようと思つたけれどもだめだつた。そこで、

「南無阿弥陀仏」

「南無妙法蓮華経」

になった。実は右も左もどっちも絶望の状態です。我々も十字架上の罪人なんです。手放しでは自分に対しては絶望です。絶望的存在です。パラダイス・ロスト〔楽園喪失〕なんです。左の盗賊は絶望的存在でありながら、それを自分で打ち消して、絶望でないかの如く思つて、自己肯定をやっている。右側の盗賊は自分が絶望であることを自覚して畏れた、平伏した。そこに右と左の差が生じた。キエルケゴールが、

「死への存在」

と言つたけれど、実は絶望的な存在なんです。

「噫、われ悩める人々るかな、この死の体」

とパウロは呻きました。これは絶望的な叫びです。

「この死の体は、どうにもなりません。けれども、あなたでした」

と言つて、キリストの贖罪を全的に受け取りました。ロマ書7章の地獄の苦しみから、8章の天国の歓喜に移つたでしょ。これはキリストの十字架の愛と霊生の義をたまわつて、パウロもよみがえりました。贖いの愛に救われて、御霊を載いたものだから、パウロはあの驚くべき活力をもつて伝道に立ち向かいました。

生まれつきの我々はロマ書7章、新生した我々はロマ書8章。地獄と天国です。ロマ書



7章と8章は、地上にある限りこの絶対矛盾構造のドラマティックな事態です。旧約で言うところ、イザヤ書34章とイザヤ書35章です。そういう物凄くはつきりしたコントラストです。人類が、世界がそうであり、我々一人一人がそうなのです。

奇病をおもちのNさんがはるばる信州からやって来られた。このキリストの救いに、生命に、力にあずからんために。これさえあれば後はどうなってもいいという。我々一人ひとりがあるというわけです。

「終りまで耐え忍ぶ者は救われるべし」

とキリストが言ったが、集会は終りの祈禱会が大切です。祈りとはおのれをキリストの中に投げ入れることだからです。「大饗宴」に招かれても、

「こういうわけですから、行けません」

と、理由をのべて断る人々の話をキリストがルカ伝14章15節から24節のところまで語っておられる。

「御国の子らと思つた連中が却つてダメだ。観念的なキリスト者ではダメだ」

というわけです。天国に入れられる人たちは人間的な判断でわかるものではない。自分をさらけだす、いつわりなきたましいをキリストはえらび給う。

「いわゆるアブラハムの裔だとか、キリスト者だとか言つていい気になつていたら

とんでもない話だ」

と。地上の人生は一ぺんしかありません。本当に天国に往くか、地獄におちるか、真剣勝負です。今の世のいわゆる民主主義をかざしている連中も甚だあぶない。日本はもう滅びへの姿ですよ。試験地獄に無道徳！ 内村先生が、

「日本には」愛想をつかした」

と言つたが本当だ。明治36年（1903年）にもう日本の滅びの姿を先生は見ていました。その通り一ぺん日本は決定的な敗北をした。藤井先生は、

「日本よ」滅びよ！」

なんていう詩を書いたりした。あの頃より今はもつと乱れている。責任は家庭も学校も本當の宗教的な力をもたないところにある。

### ●中央の十字架

今私が、これから言うのは、マタイ伝16章、マルコ伝8章、ルカ伝9章、ヨハネ伝12章にてでくるキリストの言葉です。マタイ伝16章24節、

「人もし我に従い来らんとせば、己をすて、（日々）ルカ伝）己が十字架を

負いて、我に従え。己が生命を救わんと思ふ者は、これを失い、我がために、

（また福音のために）マルコ伝）己が生命をうしなう者は、之を得べし。人全

世界をもうくとも己が生命を損せば、何の益あらん」（マタイ16・24～26）



こんどは左右の罪人と同質の十字架ではなく、中央のキリストの十字架にあずかる別な十字架を負ってゆくという、私たちのキリスト道はこの十字架道です。

「口をすてて」

とキリストは言われた。

「捨ててかかれ、捨身だぞ」

と。捨身と力<sup>りき</sup>んでも実は出来るものではない。おのれを捨てる捨てどころが問題です。十字架のキリスト、復活のキリストの中におのれを投身する。キリストに投身すると、実はキリストの十字架に捨てられてあることに気がつく。それがキリストの贖罪でした。

「お前はここにもう捨ててあるじゃないか。自分の信仰がどうだ、実存がどうだ、聖書研究がどうだと、そんなことではない。わたしはお前をここに捨てた。ひきうけたよ。もう罪の心配も要らん」

と。パウロもルターもこの絶対恩寵で助かった。だからパウロは、

「我れキリストと共に十字架せられたり」

と告白できた。パウロも捨てられてあった。私たちもパウロと一緒に、そう告白せざるを得ません。キリストの十字架は相対的、歴史的な十字架ではありません。啓示的事実です。いつも新たな霊的な事実です。気がつくためには本当に冥想して祈り込まなければならぬ。空気を私たちは吸っている、空気に囲まれているという事実の中にあるという事に平常は気がついていない。キリストの救いというこの霊的事実を、現実を受けとるまでは、魂は生きられない。不断の事実です。いつでも「南無阿弥陀仏」、いつでも「南無妙法蓮華経」、いつでも「南無キリスト」です。如何<sup>いか</sup>なる時も、何処<sup>どこ</sup>でも、在るがままの姿で、

「南無キリスト！」

と、キリストの中に南無（帰入、祈入）する。それは現在です。キリストに在って十字架さされているから、み霊を受けて力を与えられているから、負えるんですよ。甦りのキリストの霊性が私たちに十字架を負わせてくださる。

「わが荷はいと軽し」

という。こういう終末的現実において、神の国を待ち望んでいる姿は、キリストに在っておのが十字架を負っている人です。それが本当に待ち望んでいる人です。復活の生命が来ているから私たちは負えるんです。

相手を担っている姿なんです、十字架を負うというのは。敵をも担っている姿が十字架を負っている姿です。迫害されたり、いろんな難難に遭ったり、誤解されてけなされて、運命環境が苦しくなったりして、十字架を担わされる。けれども、担いの力は、キリストの甦りの力、聖霊がわがうちにあって担わしてくださる。物凄い力です。こういうみ霊の無限無量な、無量寿・無量光的な力、それが質的に来ていなかったらつまらない。十字架道には最も力強い、主と我との一如の現実があるのです。一如の生命の中にいるから、この担



いの態勢は力みではありません。

忍耐と言え、これほど力強い忍耐はない。人に何と言われようが、どう扱われようが、一向差支えない。相手が逆に気の毒でしようがない。そういう十字架なんです、この十字架は。だからキリストはこんな激しい言葉をおっしゃっている。弟子たちは出来ませんでした、イエスが地上で言われている時は。けれども、

「今にお前たちは出来るぞ」

と。キリストはペンテコステの先を予見しておられた。それが使徒行伝における使徒ペテロ、ヨハネ、パウロの現実です。キリストの御霊が来なければ、信仰など言ってもはじまらない。それでパウロは、

「御霊を宿さざる者はキリスト者に非ず」(ロマ8・9)

とはつきり言いました。

### ●主我一如

御霊以前のパウロはパリサイ信仰の力みのパウロでした。人間的立派さは結局、本当の力とも、本当の愛とも質が違うのです。次元が違う。福音と人間的信念とはちがう。み霊の現実がどんなにすばらしいものか、聖書の文字が文字の奥から叫び呻いている。パウロは時々、凱歌を爆発させているじゃないですか。また物凄い呻きを発してるじゃないですか。そういう根源の響きというものを受けとって下さい。そうしたら、もう読むだけで眼光紙背に徹する。読むことが直ちに聴くことであり、直ちに祈りです。キリストと一如の世界です。キリストの十字架に投身して、豁然として開けた無者の現実。そこに臨む聖霊の無量の現実のありがたさよ！キリストは神様の懐の中において、一如になってあれだけの事をなされた。

「我と父とは一つなり」(ヨハネ10・30)

「我は父に居り、父は我に居給う」(ヨハネ14・11)

という著しい言は、正に父子一如の現実です。私たちは絶対恩恵のゆえにキリストの中に入ることが出来ます。これはみ霊にある現実で、パウロがさんざん表現しているところです。もうそれでなかつたらつまらんです。

恩恵即信仰の恵信一如の現実！主と我と一如の信仰の現実に生きましょう。そのためには投身の祈心です、大切なのは。自分なんか全然、問題じゃなくなる。それが祈りです。躍り込むのです。祈るとは、そういうありがたい世界。キリストが、

「おのが十字架を負え」

といわれたのは、正に人のために十字架を担って、人を天界に担い上げていく。

「人のために生命を棄てる。それが本当の愛だ」

ということ、キリストは自らの十字架という無言の言で、事実で、実証なされた。キリ



ストの十字架はそのような、

「棄身の愛に生きよ」

と示し給う。み霊の愛とはこのことです。贖罪愛そのものはキリストだけであることは言うまでもありませんが、み霊の力でこのような十字架道を踏みしめながら、黙示録の最後の世界を私たちは大希望を持って待ち望む。この大希望の現実が私たちの中に二葉の姿で来ています。ありがたいことです。

- |   |                      |                            |
|---|----------------------|----------------------------|
| 1 | 主にのみ十字架を<br>われ知らず顔に  | 負わせまつり<br>あるべきかは。          |
| 2 | 十字架を負いにし<br>聖国によるこぶ  | 聖徒たちの<br>さちやいかに。           |
| 3 | わが身も勇みて<br>死に至るまでも   | 十字架を負い<br>仕えまつらん。          |
| 4 | この世のまがさち<br>さかえのかむりは | いかにもあれ<br>十字架にあり。(讚美歌331番) |

ハレルヤ!

(今橋淳主筆「活けるキリスト」誌148号 1978年6月号より転載)

